

山崎 和賀流（やまざき・わがりゅう）

1、プロフィール

俳人。大野林火に師事。昭和 45 年「濱賞」受賞。同 48 年「奥羽山系」で第 19 回角川俳句賞受賞。俳人協会会員。昭和 49 年3月 16 日、脳出血にて急逝。享年 35 歳。

<生没>

1938(昭和 13)年 11 月 27 日～1974(昭和 49)年3月 16 日

<代表作>

就職列車発つ「東京の塵になるな」

裸子の困めり富まず貧しからず

屋根にまで犬の来てゐる雪卸

<青森との関わり>

生涯を岩手県湯田村で過ごす、八戸の俳誌「北鈴」に入会した縁で本県とはなじみが深い。

2、作家解説

昭和 13 年、山崎順三・キミエの長男として岩手県湯田村に生まれる。本名は孝。昭和 26 年、村立湯本中学校入学。湯本は、正岡子規曾遊の地で「山の湯や裸の上に天の川 子規」より命名した天の川吟社があり、その会員で国語教師の高橋北羊によって俳句のイロハを教えられた。中学卒業後、北上市鍵屋に製菓職見習として就職。昭和 32 年より自営。同年、北上俳句会、夏草入会。同 37 年、生涯の師となる大野林火主宰の「濱」に入会。同郷で八戸在住の木附沢麦青（青嶺主宰）の作品に強い影響を受ける。同 45 年、「濱賞」受賞。同 48 年「奥羽山系」50 句で第 19 回角川俳句賞を受賞。角川源義をして「これこそが本当の意味での風土俳句」と言わしめた。「人の死の菓子打つことを夜の秋」の秀吟があるが、菓子職人として幾度も葬式の菓子をつくってきた彼だが、皮肉にも 35 歳の若さでこ

の世を去った。祐誓院釈照孝阿惟越致の戒名に俳の文字は見当たらない。いさぎよいことだ。

3、資料紹介

○『奥羽山系』

図書

1977(昭和 52)年

190 mm × 130 mm

昭和 52 年に発行されたが、平成9年、岩手県北上地方振興局及び湯田町の助成によって、中央公論社より再版。序文大野林火、跋文木附沢麦青、あとがきは菅原多つを。再版に寄せてと題し、俳人協会会長で、和賀流の兄弟子でもある松崎鉄之介が筆を執っている。